

社会科（歴史的分野）学習指導案

展開学級 3年

1 単元名

歴史的分野 第6章 二度の世界大戦と日本 第4節 第二次世界大戦と日本

2 単元について

本単元は、学習指導要領の歴史的分野の内容(5)カ「経済の世界的な混乱と社会問題の発生、昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国の政治・外交の動き、中国などアジア諸国との関係、欧米諸国の動き、戦時下の国民生活などを通して、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解させる。」によって構成されている。そこで本単元では、第二次世界大戦を通して、日本や世界から失われたものに着目させ、経済の混乱から国際協調が失われ自国優先主義に陥ったこと、戦時体制へと向かう中で自由で豊かな市民生活が失われたこと、原子爆弾の投下によって人間の尊厳が蔑ろにされたことなどに触れていながら、生徒が自分事として思考を深められるような学習活動を行わせたい。

1937年7月、北京郊外の盧溝橋付近で日本軍と中国軍の衝突が起こり、陸軍は軍事行動を拡大、海軍も東シナ海を超えて南京を攻撃するなどして、日中戦争に突入した。戦争が長期化すると、経済統制を強化して総力戦に対応できる体制を作り上げることが求められた。政府は国家総動員法を議会に提出し、1938年に公布された。こうして大きな権限を持った政府は、国民徴用令などを実施し、労働者の賃金や会社の資金調達なども統制し、一般国民が軍需産業に動員されるようになった。しかし、軍需産業の確保は円ブロック圏内では到底足りず、欧米からの輸入に頼らざるを得なかった。しかし、アメリカは日本の動きに対して自国への本格的な挑戦とみなして、日本に対する経済制裁を通告してきたため、日本の軍需物資の調達は極めて困難になった。それと同時に民需品の生産や消費も厳しい制限を受けた。1938年には綿糸やガソリンの切符制が実施され、40年には砂糖・マッチの切符制など、生活必需品に対する政府の統制は一段と厳しさを増し、国民生活は苦しくなっていた。

1930年代後半になるとヨーロッパではドイツが対外膨張政策は一段と活発さを増した。この問題を解決するためにミュンヘン会議が開催されたが、英仏側の譲歩によってドイツの要求が認められた。ドイツは39年8月に独ソ不可侵条約を結び、9月にポーランドへ侵攻した。宥和政策の失敗を悟った英仏はドイツに宣戦し第二次世界大戦が始まった。日本国内ではドイツの勝利を予想する空気が流れ、これを背景として、米英との戦争を覚悟してもドイツと軍事同盟を組んで東南アジアを日本の勢力圏に組み込もうとする主張が強くなり、日独伊三国同盟を結ぶこととなる。三国同盟の成立と同時期に、日本は東アジアと東南アジアを勢力圏とする大東亜共栄圏の確立を目指して積極的な南方進出を行い、仏領インドシナへも進出した。こうした南進政策は英米の利害と衝突し、アメリカは日本に対して航空機用ガソリンの禁止など対抗措置をとるなど連合国側は対日経済封鎖を強めていった。ヨーロッパにおけるドイツの優勢が伝えられると日本でもドイツのように強力な全体主義組織を作り上げようとする動きが出てきた。こうして諸勢力を集めて組織した大政翼賛会が発足した。こうして議会制度は形骸化し、議会は力を失った。

1941年4月、アメリカとの戦争を回避しようとした近衛内閣は日米関係を改善するために交渉を開始した。しかし、ドイツが独ソ不可侵条約を破って独ソ戦を始めると、軍部の強い主張によって対米戦となっても南方進出を強化しようとする声が高まった。このような日本の動きに対して不信感を強めたアメリカは、対日石油輸出の全面禁止という強い措置を発動し、アメリカ・イギリス・中国・オランダは、いわゆる ABCD 包囲陣によって対日経済封鎖を強化した。石油の大部分をアメリカから輸入していた日本にとって、これは大きな打撃であった。この後、東条英機が首相と陸軍大臣を兼任し開戦準備と対米交渉が並行して進められた。このころにはアメリカでも戦争は不可避と考えられ、ハルノートを日本側に提示した。ハルノートをアメリカによる最後通牒とみなした日本は1941年12月8日に海軍がハワイの真珠湾を攻撃し太平洋戦争が始まった。日本軍は開戦の初めにハワイやマレー半島沖で米英の主力艦隊を撃滅し、開戦から半年足らずで東南アジアのほぼ全域を制圧した。日本国内では戦争初期の大勝利による熱狂の中で政府・軍部に対する国民の支持が高まった。また国民は戦争協力に動員され、マスメディアは国民感情をあおった。しかし、1942年6月のミッドウェー海戦での敗北など戦局は大きく転換し、1944年6月にはマリアナ沖海戦で海軍が壊滅的打撃を受けると、制空権・制海権を失い、日本軍は後退を続けた。日本軍は特攻隊による体当たり攻撃という戦術まで採用したが戦況を回復することはできず、本土ではアメリカ軍による空襲が連日のように行われた。1945年3月には硫黄島がアメリカ軍の手に落ち、4月からは沖縄戦が始まった。ヨーロッパでは5月にヒトラーが自殺してドイツが降伏し、日本は孤立無援の状態となった。7月には米英中によりポツダム宣言が発表されたが、日本はソ連を仲介とする和平に望みをかけてポツダム宣言を黙殺した。しかし、アメリカによって8月6日に広島へ、9日に長崎へ原子爆弾が投下されたことに加え、和平仲介者として望みを託していたソ連が対日参戦を表明すると、日本政府は戦争終結の決断を下す。

このように第二次世界大戦の原因や経過には、国内外の様々な要因や思惑が重なり合っている。そこで本単元では、単元を貫く問いを「戦争で失われたものは何か。得たものはあるか。」と設定し、それぞれの内容の視点から第二次世界大戦を捉えることで、様々な角度から考察させるような単元を構成した。第1時では、ヨーロッパ戦線を取り上げる。最初に第一次世界大戦以降のドイツの国内情勢に立ち返り、ナチスがヴェルサイユ体制への反発心、共産主義に対する警戒心、アウトバーン建設などの経済政策によって支持を集めたことを再確認する。その上で、オーストリア併合に端を発するドイツの拡大と英仏の融和政策、さらに重なるヨーロッパ戦線の拡大を確認する。そして、日独伊三国同盟の成立と、独ソ不可侵条約の成立と破棄について触れ、連合国と枢軸国による第二次世界大戦に突入したことを理解させる。その上で、アウシュビッツ収容所やアンネの日記などを示して、ユダヤ人虐殺について考えさせる。第2時では、日本に焦点を当て、世界恐慌をきっかけとして国際社会における日本の立ち位置がどのように変化したのかを考えさせる。世界恐慌後の欧米列強による経済ブロック圏の形成を振り返り、資源獲得のために中国や東南アジア地域に進出する必要性があったことを認識させる。ここでは、太平洋戦争開戦までの過程と、開戦直後の日本軍の勝利と占領地域を紹介する。また、当時作成された映像資料や戦後に撮影された戦地での経験談などの映像資料を見せることによって、戦争が身近にも起きうるものであるという感覚を生徒にもたせたい。そして太平洋戦争では日本軍が苦しい戦況ばかりではなかったという事実を認識させたい。第3時では、「わが家の新聞」という資料を用いて、戦時下の日本国民の生活について扱う。「わが家の新聞」には当時の国民の生活の様子や学校での戦時教育を感じさせる記述が多くある。それらを示しながら、実際の写真やニュース映像、戦時体制への協力を求めるポスターを示して人々の暮らしの困窮を認識させる。本時である第4時では、引き続き「わが家の新聞」を用いながら新聞と戦争の関わりに焦点を当てる。前時までの学習で、生徒たちは第二次

世界大戦が各国国民を巻き込んだ総力戦であること、当時の日本国民は相当に生活を制限されていたという認識をもっているはずである。そこで本時では、まず「わが家の新聞」に掲載されている「最近の報道」に着目させ、当時の国民が何を情報源として戦況を知っていたのかを確認する。そして次に、当時の日本で発行されたミッドウェー海戦を伝える新聞記事と実際の戦況のデータを示して、両者の違いを認識させる。その上で「なぜ当時の新聞は真実を報道しなかったのだろう」と問い、新聞社数や政党数の変遷の資料を基に考えさせる。このような活動を通じて、当時の新聞が国民に与えた影響・戦時下の人々の暮らしについて考察し、表現させたい。第5時では、まず日独伊それぞれがどのような経過で降伏へと向かったのか時系列で整理する。また、広島・長崎への原爆投下について実際のニュースや写真を示した上で、原爆投下の是非に関する日米双方の主張を紹介し、立場による解釈の違いや対立があることに気づかせる。そして単元のまとめとして「戦争で失われたものは何か。得たものはあるか。」に対する答えを考えさせ、他者と意見交流させることで、より深い認識をもつ機会としたい。

以上のような狙いをもって単元を構成した。単元の学習を通して、戦時下の人々の選択を当時の人々の立場で考察できる視点や、世界大戦が引き起こされた経緯を理解しこれからの社会の形成に向き合うことのできる力が育つことを願っている。

3 研究主題との関連

本校の社会科研究主題は、「生徒が主体的に課題を追及・解決し、自ら表現する力を育成するための授業の工夫」である。これまでの取組により、生徒が社会的事象に関心を持ちながら、日々の授業に向き合うことができるようになりつつある。しかしながら、学習課題に対して生徒が自ら考えた内容を表現するところまで思考を深められていなかったと考える。本校の研究計画にも「本校の生徒は、全国学力・学習状況調査などの結果から、基礎的・基本的な知識・技能は身に付いていると考えられる。しかし課題に対して機械的に取り組み、定期テストでの得点を意識する中で知識などの習得だけに満足しがちな生徒も少なくない。」とある。生徒が主体的に課題を解決するためにも、単元や授業を構成する際には、単元を貫く問いや生徒が本気で考えたい問いの設定に努め、生徒の思考の深化を促す必要があると考える。

4 生徒の実態 36名(男子16名 女子20名)

本単元の計画をする上で行った事前アンケートの結果と分析は次の通りである。

【事前アンケート】(実施生徒数 29名)

問1. 日本の太平洋戦争にどんなイメージがありますか。 特攻隊、真珠湾、アメリカと戦って負ける、過酷な戦争、たくさんの人が亡くなった 海上での戦争、大きい戦争、原爆、大和・長門、複雑な要因、わかりません など
問2. 太平洋戦争時の人々の暮らしにどんなイメージがありますか。 貧しい、食糧不足、疎開、防空壕に避難する、戦争をしているのは知らない など
問3. 太平洋戦争時の人々の情報源は何だったと思いますか。 ラジオ(18名)、新聞(10)、テレビ(1)、わかりません など

問1により本学級の生徒は、太平洋戦争に対して様々なイメージや知識を有していると言える。日本の劣勢に関する回答をした生徒は約半数で、戦況などに関して具体的に回答をした生徒は約2割程度だった。太平洋戦争がどのようなものだったかについてわからないと回答する生徒も数名い

た。このように太平洋戦争の戦況に対して具体的にイメージできる生徒は多くないため、時系列で戦況を整理することや、戦後に撮影されたインタビューなどの資料を多く用いることで、実際の戦場がどのような状況だったのか・当時の兵士たちはどのようなことを考えていたのかなどに触れさせる授業を行いたい。問2に対しては、太平洋戦争下の日本では国民生活が困窮していたというイメージを有する生徒が多く、約9割の生徒が「苦しい」「ひもじい生活」などと回答した。そのため、戦時下の人々について扱う授業では、当時発行されたポスターや標語など、国民生活の困窮について理解できる資料を多く用いて、生徒たちの認識を補強したい。またそのような生活を強いられながらも国民が積極的に戦争に協力していた事実を認識させ、生徒の思考を揺さぶりたい。問3からは、生徒たちの大半が当時はラジオが情報源だったと認識しており、新聞が情報源だったと考える生徒よりも多いことがわかる。国民にとって新聞が大きな情報源であったことを認識させたうえで、その新聞が誤った情報を伝えていたことや政府が情報統制を行っていた事実から、戦時下の国民生活が様々な面で統制されていたことを理解させるような授業を行いたい。そして、戦時下の人々が生活の様々な面で国家による統制を受けていたことを生徒の言葉で表現させる授業を行いたい。これらの授業を通じて、単元のまとめとして「戦争で失われたものは何か。得たものはあるか。」に対する答えを考えさせ、他者と意見交流させることで、より深い認識をもつ機会としたい

5 単元の目標

- (1) 昭和初期から第二次世界大戦の終結までの我が国及び諸外国の政治・外交の動き、戦時下の国民生活などを基に、軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類全体に惨禍を及ぼしたことを理解する。
(知識及び技能)
- (2) 戦争に向かう時期の社会や生活の変化、世界全体の政治や外交の動きなどに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、第二次世界大戦と人類への惨禍について、近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現する。(思考力・判断力・表現力等)
- (3) 第二次世界大戦と人類への惨禍について、そこで見られる課題を主体的に追究、解決しようとする態度を養う。(学びに向かう力、人間性等)

6 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
軍部の台頭から戦争までの経過と、大戦が人類に惨禍を及ぼしたことを理解している。	第二次世界大戦と人類への惨禍について、近代の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現している。	第二次世界大戦と人類への惨禍について、そこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

7 指導と評価の計画(6時間扱い)

(○…評定に用いる評価 ●…学習改善につなげる評価)

主な学習活動	知	思	主	評価規準
--------	---	---	---	------

1	単元を貫く問い：戦争で失われたものは何か。得たものはあるか。			
	第一次の問い：第二次世界大戦は、なぜ起こり、どのように拡大したのだろう。			
	・ヨーロッパで戦争が起こり、拡大していった経緯を理解する。 ・ドイツやイタリアと同盟を結ぶなど、日本が取った行動について、国際的な視野で考察し、表現する。	●	○	●ヨーロッパで起こった戦争の様子を地図や写真から読み取り、原因や経過を理解している。 ○日独伊三国同盟を結んだ日本の行動について、国際的な視野を踏まえて考察、表現している。
2	第二次の問い：太平洋戦争は、どのようにして起こったのだろう。			
	・日本が太平洋戦争に向かった理由を、国力の差や資源の分布、占領した地域に着目して考察し、表現する。		○	○日本が太平洋戦争に向かった理由について、日米の国力差や資源の量、占領した地域と関連付けて考察し、表現している。
3	第三・四次の問い：戦時下の人々は、どのような暮らしをしていたのだろう。			
	・戦争の長期化とともに、国民生活が統制されていく様子を理解する。	●		●日本国内、植民地や占領地における状況を理解している。
4 本 時	・戦時下の日本において情報統制が行われた事実を理解する。 ・戦時下の経済的困窮や戦時教育、情報統制などの影響を資料から読み取り、人々の生活について考察し、表現する。	●	○	●当時の戦況や新聞に関する資料を読み取り、戦時下の日本において情報統制が行われた事実を理解している。 ○資料を参考にして、戦時下の人々の生活について考察し、表現している。
5	第五次の問い：第二次世界大戦は、どのような経過をたどって終結したのだろう。			
	・イタリア、ドイツの降伏、沖縄戦から原爆投下などを通して、戦争終結までの経緯を理解する。 ・第二次世界大戦と人類の惨禍について、そこに見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。	●	●	●イタリア、ドイツの降伏、沖縄戦、原爆投下など戦争終結までの概要を理解している。 ●第二次世界大戦と人類の惨禍について、そこに見られる課題を主体的に追究、解決しようとしている。

8 学習展開

(1) 本時の目標

- ・当時の戦況や新聞に関する資料を読み取り、戦時下の日本において情報統制が行われた事実を理解

できる。(知識・技能)

・資料を参考にして、戦時下の人々の生活について考察し、表現できる。(思考力・判断力・表現力等)

(2) 本時の展開

(○…評定に用いる評価 ●…学習改善につなげる評価)

時配	学習内容と活動	指導や支援の手立て(●○評価)	留意点等
導入 10分	・前時までの復習として「欲しが りません 勝つまでは」「食べ られる虫」「国民学校の教科 書」などを確認する。 ・第二次世界大戦中に小学生 が書いた「わが家の新聞」を 読む。 ・戦争に関する内容 ・日中戦争に関する内容 ・この少年の戦争に関する情報 源を探す。 ・朝日新聞 ・少国民新聞	・「前回の授業で扱った戦時下の人々 の暮らしは、どんなものだったろう」 と問う。 ・「欲しがりません 勝つまでは」「食べ られる虫」「国民学校の教科書」の 資料をテレビに映し、総力戦による戦 時体制だったことを確認する。 ・「わが家の新聞(サイキンノハウド ウ)」をテレビに映す。 ・Google Classroom で同じ資料を 生徒にも配付する。 ・「どんな内容が書いてあるだろう」と 問う。 ・「この情報を少年はどこから得たと書 いてあるか探してみよう」と指示する。	
	学習課題：当時の新聞は、人々にどのような影響を与えたのだろうか。		
展開① 10分	・個人で「ミッドウェー海戦を伝 える新聞記事」を読み、どのよ うな戦況だったのか予想する。 ・日本軍の優勢だった ・米軍は被害が大きかった ・自分の意見を発表する。	・「ミッドウェー海戦を伝える新聞記 事」をテレビに映す。 ・「この新聞記事を読んで、日本軍は 勝利したのか考えよう」と指示する。 ・タイマーで2分測る。 ・Google Classroom で同じ資料を 生徒にも配付する。 ・挙手によって発表させる。 ・「ミッドウェー海戦の戦況」をテレビに 映す。	

	・「ミッドウェー海戦の戦果」を見て、新聞記事との違いを見つける。 ・日本軍の被害が少なく書かれている ・日本軍が優勢だったかのようになっている。 ・自分の意見を発表する。	・「新聞記事の内容と実際の戦況を比べて、内容が異なる部分を探してみよう」と指示する。 ・タイマーで2分測る。 ・「異なる部分はどこだろう」 ・「どの数字が異なっているだろう」などと聞く。 ・挙手によって発表させる。	
展開② 15分	・班(4~5人)を作る。 ・班ごとに「当時の新聞が真実を報道しなかった理由」を考える。 ・国家総動員法などにより政府による統制が強まっていたから ・政府が新聞を統制していたから ・戦争の失敗を隠したかった ・国民を不安にさせないため ・戦時下において新聞統合などの情報統制が加速したことを理解する。 ・大本営発表の映像と発表された戦果を見て、大本営発表について理解する。	・「なぜ新聞は実際の戦況を伝えなかったのだろうか」と問う。 ・班(4~5人)を作らせる。 ・「今までの学習内容と資料を基に、新聞が真実を報道しなかった理由を考えてみよう」と指示する。 ・「1920~1942年における日刊普通新聞社数の推移」「主要政党の変遷図」をテレビに映す。 ・Google Classroomで同じ資料を生徒にも配付する。 ・タイマーで5分測る。 ・いくつかの班にどのような意見が出たか発表させる。 ・戦時下において新聞統合などの情報統制が進んだことを説明する。 ・大本営発表の映像をテレビで流す。 ・大本営発表によって誤った戦果が伝えられていたことを説明する。	・机間支援
まとめ① 8分	・個人で、本時の学習課題に対する答えを考え、Google	・「わが家の新聞(サイキンノハウドウ)」をもう一度テレビに映す。 ・「では、今日の授業で考えたことを基	

	Form に入力する。 ・新聞が誤った情報を伝えたことで、人々は戦争での勝利を信じた。 ・戦時体制を維持するために新聞を使った情報統制が行われた。 ・自分の意見を発表する。 ・級友の意見をギガタブ上で確認し、参考になったものがあれば自分の意見に加え、ワークシートに記入する。	にして、当時の新聞が人々に与えた影響を考えてみよう」と指示する。 ・学習課題に対する答えを個人で考えさせ、Google Form に入力させる。 ・タイマーで 3 分測る。 ●当時の戦況や新聞に関する資料を読み取り、戦時下の日本において情報統制が行われた事実を理解できたか。(知識・技能) ・よく書けている生徒を数名指名し、発表させる。 ・ギガタブ上で級友の意見にも触れたうえで、ワークシートに記入させる。	・机間支援
まとめ② 7 分	・個人で、前時からのまとめとして「戦時下の人々はどのような生活をしていたのだろう。」に対する答えを考え、Google Form に入力する。 ・戦時体制により経済的に苦しい生活をしていたが、経済・教育・報道などの統制によって政府に協力する暮らしだった。 ・自分の意見を発表する。 ・級友の意見をギガタブ上で確認し、参考になったものがあれば自分の意見に加え、ワークシートに記入する。	・「前回からのまとめとして、「戦時下の人々はどのような暮らしをしていたのだろう。」に対する答えを考えよう」と指示する。 ・学習課題に対する答えを個人で考えさせ、Google Form に入力させる。 ・タイマーで 5 分測る。 ○資料を参考にして、戦時下の人々の生活について考察し、表現できたか。(思考・判断・表現) ・よく書けている生徒を数名指名し、発表させる。 ・ギガタブ上で級友の意見にも触れたうえで、ワークシートに記入させる。	・机間支援

(3) 本時の評価

- ・当時の戦況や新聞に関する資料を読み取り、戦時下の日本において情報統制が行われた事実を理解できたか。(知識・技能)
- ・資料を参考にして、戦時下の人々の生活について考察し、表現できたか。(思考・判断・表現)

9 指導資料

(1) 板書計画

戦時下の人々(2)	
当時の新聞は、人々にどのような影響を与えたのだろう。	
問1.「ミッドウェー海戦を伝える新聞記事」を読み取ってみよう。	問3.なぜ新聞は真実を伝えなかったのだろう。
【結果】 勝利	・政府が新聞を統制していたから
【理由】 日本軍の方が倒した空母が多い	・戦争の失敗を隠したかった
猛攻・奪取など書いてある	・国民を不安にさせないため
問2. 実際の戦況と新聞記事は何が違う？	○当時の新聞が人々に与えた影響は？
・実際には日本の空母が4隻喪失している。	○戦時下の人々はどのような生活をしていた？
・米軍の実際の被害は空母1隻撃沈	

(2) 提示資料

○「欲しがりません 勝つまでは」

出典:ウィズニュース(with news)

「欲しがりません 勝つまでは」11歳少女の最も有名な標語の真実



○「食べられる虫」

出典:新学社歴史資料集 2024 p.187



○「国民学校の教科書」

出典：奈良県立図書館情報局



○「わが家の新聞」

出典：NHK「太平洋戦争中の“わが家の新聞”～13歳が見た終戦の日」



○「ミッドウェー海戦を伝える新聞記事」

出典：新しい社会 歴史 p.235



○「ミッドウェー海戦の戦果」

出典：読売新聞オンライン「大本営発表はなぜ「ウソの宣伝」に成り果てたか」

	実態
1942年6月5日 ミッドウェー海戦	日本：空母4隻喪失 アメリカ：空母1隻撃沈

○「大本営発表の戦果と味方の損害」

昭和17年（1942年）の海戦での大本営発表の戦果と味方の損害		
	大本営発表	実際
6月5～7日 ミッドウェー海戦	空母1隻喪失、 1隻大破 空母2隻撃沈	空母4隻喪失 空母1隻撃沈*
8月9日 第一次ソロモン海戦	重巡洋艦9隻撃沈 輸送艦10隻撃沈	重巡洋艦4隻撃沈 輸送艦1隻撃沈
8月24日 第二次ソロモン海戦	空母「龍驤」大破	「龍驤」を喪失
10月11日 サボ島沖海戦	海戦自体を発表せず	重巡洋艦1隻撃沈 駆逐艦1隻撃沈
10月26日 南太平洋海戦	空母4隻撃沈* 戦艦1隻撃沈	空母1隻撃沈、 1隻大破
11月12～15日 第三次ソロモン海戦	戦艦1隻沈没、 1隻大破 戦艦2隻撃沈	戦艦2隻喪失 戦艦の撃沈なし

○「1920～1942 年における日刊普通新聞社数の推移」

出典：近代日本における新聞社通信局網の変遷

	1920	1925	1929	1932	1935	1938	1942
北海道	35	54	64	77	80	62	1
青森	4	9	9	12	15	11	1
岩手	4	4	11	13	13	14	1
宮城	4	10	17	18	17	16	1
秋田	9	6	5	5	5	7	1
山形	11	14	15	15	12	11	1
福島	8	12	19	21	24	28	1
茨城	4	8	9	8	9	9	1
栃木	3	5	9	11	15	10	1
群馬	6	6	16	15	15	13	1
埼玉	2	5	6	8	11	7	1
千葉	2	2	7	10	14	12	1
東京	121	118	170	194	234	238	11
神奈川	18	16	22	19	17	20	1
新潟	16	20	22	23	21	20	1
富山	7	10	10	7	8	6	1
石川	7	8	8	8	8	10	1
福井	12	12	17	15	14	12	1
山梨	8	10	6	9	6	7	1
長野	21	31	38	41	39	38	1
岐阜	14	16	18	16	14	12	1
静岡	10	14	33	35	51	56	1
愛知	33	56	65	74	83	61	5
三重	19	26	19	25	23	16	1
滋賀	8	12	18	21	23	17	1
京都	24	28	26	40	38	33	1
大阪	40	66	69	86	89	90	4
兵庫	21	41	43	39	51	48	1
奈良	5	10	6	6	10	9	1
和歌山	14	16	17	23	18	18	1

鳥取	3	6	4	5	4	4	1
島根	2	2	3	3	3	2	1
岡山	6	7	10	10	11	10	1
広島	12	18	19	20	18	18	1
山口	7	15	24	18	27	17	1
徳島	5	3	3	2	4	3	1
香川	4	3	2	2	2	2	1
愛媛	7	14	23	15	20	17	1
高知	5	5	2	3	4	4	1
福岡	40	46	59	71	67	40	1
佐賀	5	9	7	11	11	4	1
長崎	15	17	21	17	13	10	1
熊本	5	8	10	8	8	6	1
大分	6	18	26	28	29	32	1
宮崎	2	2	5	9	15	12	1
鹿児島	4	5	5	5	4	5	1
沖縄	5	3	3	3	5	6	1
	623	826	1020	1124	1222	1103	65

出典：「主要政党の変遷と国会内勢力の推移」

[illegible]